「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 28 年　1 月　10 日
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏　名	田中　美帆

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

熊本サンクチュアリ

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

動物福祉実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 28 年 11 月 14 日　～　平成 28 年 11 月 17 日　（4 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

平田聡（京都大学教授）、森村成樹（京都大学特定准教授）、山梨裕美（京都大学特定助教）

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

この実習は、飼育下のチンパンジーとボノボを対象に、動物福祉の実践的取り組みおよび行動観察や比較認知科学研究のための基礎を学ぶことを目的としておこなわれた。動物福祉向上の実践的な取り組みとして、飼育環境に対して工夫をするエンリッチメントというものがある。環境そのものを変化させたり、採餌の方法を工夫するといったエンリッチメントや動物が本来持つ認知能力を活用できるようにするエンリッチメントなどがある。今回、熊本サンクチュアリのチンパンジーやボノボを対象に、エンリッチメントツールを作成し、その設置による行動の変化やどのようなエンリッチメントツールが興味を惹くかを観察した。

1 日目　チンパンジー・ボノボの予備観察、動物福祉講義、エンリッチメント道具の製作
2 日目　熊本サンクチュアリによる採食エンリッチメントの行動観察、
　　エンリッチメント道具の製作、自作エンリッチメント設置後の行動観察（チンパンジー）
3 日目　エンリッチメント道具の製作、自作エンリッチメントの行動観察（ボノボ）、
　　ドローン飛行実習
4 日目　発表

3 班に分かれて、エンリッチメントツールの作成を行った。一つの班は、指でほじれば餌が出てくる板や転がすと餌が出てくる筒や大きなボールを作成していた。チンパンジーボノボの性質を生かした見た目にも遊びがいのある道具の数々で、特にチンパンジー放飼場での設置では人気を博していた。もう一つの班は、透明なアクリルでできた筒に層状に餌やおがくずなどを詰めたものを作成していた。筒が長いため、お玉などの道具を使用しないと底の餌まで到達できない仕掛けになっており、採食エンリッチメントのみならず認知能力も活用できる（かもしれない）。ボノボ放飼場での設置では、餌の獲得には至らなかったが、道具をもち筒にいれることまでは出来ていた。観察者側もハラハラと応援したくなるいいツールだった。私たちの班は、餌を混ぜた小麦粉やおがくず入り封筒や、餌をくくりつけたロープなどを設置した。ロープには、餌のついているものとついていないもの、つまり当たりと外れをつくり、長い時間餌を探してもらうのが狙いだった。2 日目のチンパンジー放飼場ではほとんどの個体に無視され、チーム一同肩を落としていたのだが、翌日のボノボ放飼場ではすべての個体において利用が観察された。

4 日間の実習を通して、エンリッチメントの必要性を身を持って感じた。実習以前は、エンリッチメントといっても動きまわれるようロープを張ったりベッドを作ったりするくらいで、めざましい行動の変化が起こるとは思っていなかった。それに、動物自身が過剰なエンリッチメントを望んでいるのかとも疑問に思っていた。今回、エンリッチメント道具を作成し行動観察をしたことで、自分の認識が誤っていたことに気づいた。チンパンジーでもボノボでも、すぐに道具に興味を示し、いつまでも触っていた。興奮したり、うえでゆっくりしたり使い方は様々だった。同じ設置物では飽きてしまうので、試行錯誤を繰り返しながら、飼育下動物の環境改善のために継続して考えていかなければならない、大変な作業だなと思った。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

チンパンジーの放飼場

道具の点検

肩を落とすメンバー

餌をもらう

ドローン飛行実習

６．その他（特記事項など）

この実習は、PWS 霊長類学ワイルドライフ・リーディング大学院の支援を受けておこなわれました。
心よりお礼申し上げます。